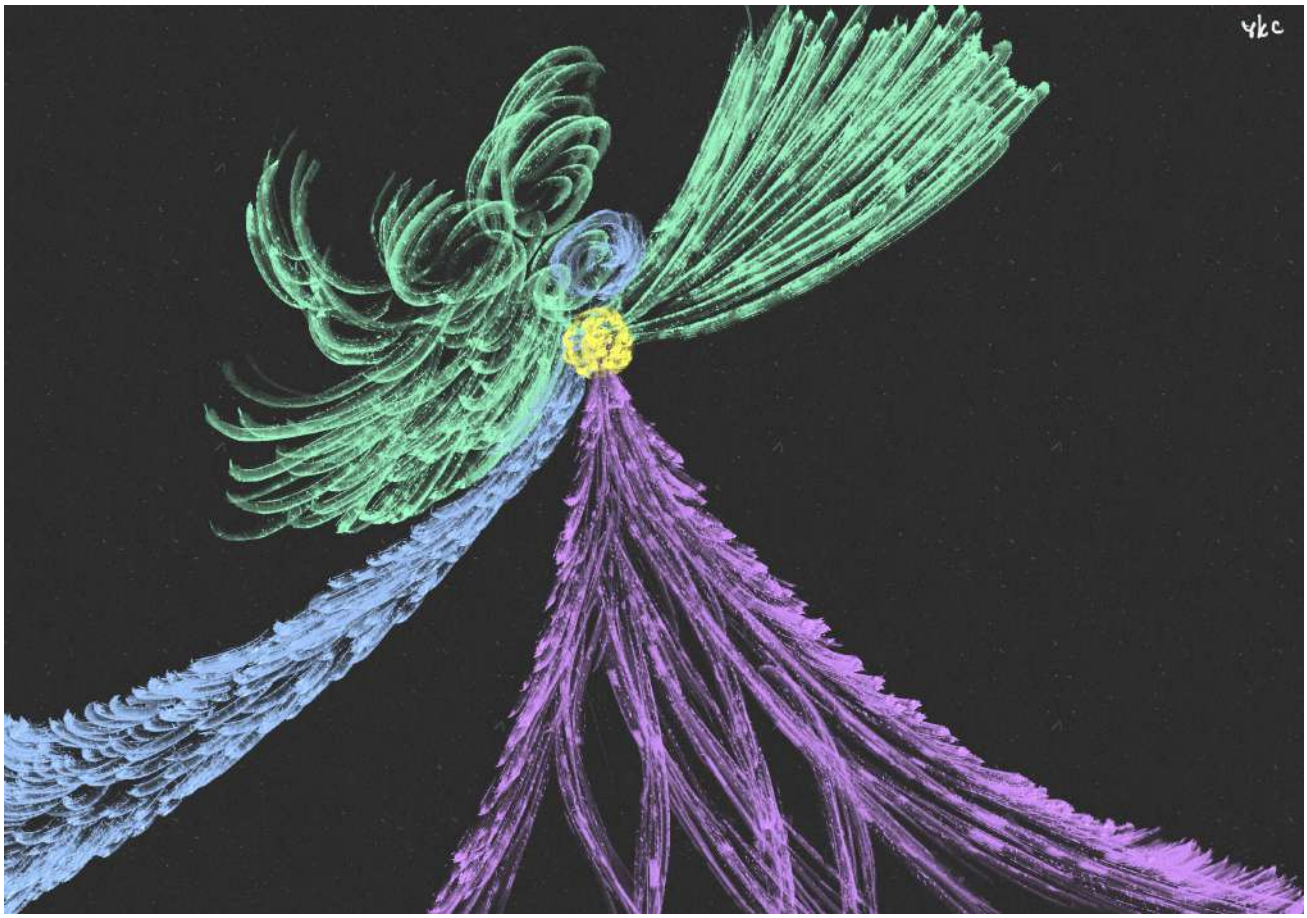
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 314

Website:「発達理論の学び舎」



No.1413 未知なるもの_Something Unknown

© YOHEI KATO 2020

目次

6261. 今朝方の夢

6262. 乾燥機の故障より/『野火』の感想の追記

6263.『日本のいちばん長い日(2015)』を見て/メタ理論についての補足

6264. "This Giant Beast That is the Global Economy (2019)"の第4話を見て/マルクスの発達倫理

6265. 今朝方の夢/美的体験の持つ性質

6266.『実録·連合赤軍　あさま山荘への道程(2008) 』を見て

6267. 若松孝二監督の他の作品への関心

6268. "This Giant Beast That is the Global Economy (2019)"の第5話を見て

6269. 今朝方の夢

6270. 日本への一時帰国に向けて

6271. 発見される美/解釈と創作/エコエティカと積極的・創造的な倫理的実践

6272.『父親たちの星条旗 "Flags of Our Fathers (2006)"』と"This Giant Beast That is the Global Economy (2019)"の第7話を見て

6273. 存在論的単価/共存在感覚/創造的な営みとしての学習

6274. 創作活動に関して

6275.「在ることを在る経験」/保留の感覚/今朝方の夢

6276.『硫黄島からの手紙 "Letters from Iwo Jima (2006)"』を見て

6277.『11·25自決の日　三島由紀夫と若者たち(2012)』

6278. "This Giant Beast That is the Global Economy (2019)"の第8話を見て/友人がかつて贈ってくれた『青の時代』

6279. 一時帰国に向けて

6280. 今朝方の印象的な夢

6261. 今朝方の夢

時刻は午前7時を迎えようとしている。今朝はいつもよりゆったりと起床し、6時に起きた。身体のリズムに応じて必要な分の睡眠を取っていくことはいつもと変わりない。

今、ゆっくりと空がダークブルーに変わり始めている。外気は低く、日の出も遅くなり、本当に秋の深まりを実感する。

暗闇の中を数羽の小鳥たちが鳴き声を上げている。彼らの鳴き声に耳を澄ませながら、今日の活動に思いを馳せる。

今日はまず、いつものように創作活動から1日の取り組みを始める。これはどんな日であろうとも変わらない。日記を執筆し、絵を描き、その後に作曲実践に励むというのは習慣的なサイクルであり、そのサイクルが一巡したところでここ最近は読書に励んでいた。しかし今日は、秋の対談講演会に向けた資料を午前中から作っていこうと思う。というのも、昨日の午後は結局それを作ることができなかったからである。

今日は早朝の作曲実践がひと段落したら資料の作成に取り掛かる。今日中に全てを完成させる必要は全くないが、大枠を作り、大抵の内容を資料に盛り込むところまでできたらと思う。後の細かいところはまた後日作っていけばいい。美学や霊学を含め、ここ数ヶ月間に学んできたことを当日の対談講演会で話すことを前提にした資料作りをしていこう。資料作りもまた創作活動の1つであるから、くつろぎの中で楽しみながら作っていこう。

今朝方の夢を回想している。いくつか覚えている場面がある。夢の中で私は、日本の田舎町にいた。田舎町と言っても、未開の地ではなく、ある程度開発が進んでおり、駅近郊には様々な商業施設があった。私はその町に住んでいるようだった。

駅から自宅のマンションに向かって歩いていると、変わった作りの宿泊施設を見つけた。それは道路に面しており、3つの部屋だけがある施設だった。道路と各部屋を仕切っているのは壁でもドアでもなく、カーテンレースだった。ちょうどカーテンレースが開けられていたので中を覗くと、中にはベッドとテレビだけが置かれていて、3つの部屋もまた壁で仕切られておらず、カーテンのような布

で仕切られているだけだった。その宿泊施設の管理人らしい中年女性がこの施設について簡単に私に説明してくれた。その後、私はその場を離れ、自宅に向かって行った。

自宅のマンションの前までやってくると、そこに友人がいた。よく見ると、彼女の妹もそこにいて、2人は中学生か高校生ぐらいの容姿になっていることに気づいた。どうやらこれから3人でゲームをするか、何か話をするかという予定を立てていたようであり、私はそれをすっかり忘れていた。マンションの前で待たせてしまったことを申し訳ないと思い、私はすぐにオートロックの鍵を使って、まずはマンションの外側のドアを開け、中に入った。そこから階段を上って自分の部屋まで行こうとすると、友人が2階で大きなカプセル型の設備を見つけた。

彼女は興味本位でそれをいじると、水が大量に放出され、彼女の体はずぶ濡れになってしまった。タオルを持ってこようかと声をかけたが、彼女の自宅が近いとのことなので、すぐに自宅に戻って着替えてくると彼女は述べた。彼女の妹と私はその場に残され、仕方ないので先に部屋に行って、2人で話でもしようかと思った。今朝方はそのような夢を見ていた。実際のところは、その他にも場面があったことを覚えているが、その内容については思い出すことができない。感覚として、それらの夢の場面は肯定的な感情を引き起こすようなものだったと思う。フローニンゲン：2020/9/27（日）07:14

6262. 乾燥機の故障より/『野火』の感想の追記

――人生はある環境の中で続いていく。だがそれは、単に環境の中で継続していくのではなく、その環境ゆえに、そしてその環境との相互作用を通じて継続していくのだ――ジョン・デューイ

時刻は午前7時半に近づこうとしている。辺りは随分と明るくなったが、まだ暗さが少し残っている。空は雲に覆われていて、今朝は朝日を拝むことができなさそうである。

先週から自宅の乾燥機の調子がおかしくなってしまった。それはそれほど古くなく、確か2年前に新しいものに替えてもらったばかりだった。乾燥機の中に埃でも溜まっているのではないかと思って中を開けて調べてみたところ、確かに埃が溜まっていて、それらを取り除いたのだが、それでも乾燥させる力がほぼない状態に変わりはなかった。そのため、今回も不動産屋に連絡をしたところ、早速

返信があり、来週の早いタイミングで新しい乾燥機を取り付けてもらえることになった。洗濯機は私が来た5年前と変わらずに動いているのだが、乾燥機は壊れやすいのか、今回が3台目になる。

日本で生活をしていた時は、洗濯物を自分で外に干していたが、今となってはそれが信じられない。意外と馬鹿にならないほどに時間を食ってしまうのだ。アメリカでの生活が始まったことに合わせて乾燥機を使うようになり、それ以降は乾燥機にお世話になりっぱなしである。欧米の先進国では、基本的に洗濯物を外に干すという習慣がなく、乾燥機を大抵どこの家でも使っている。先週から乾燥機の調子がおかしくなってしまったので、2回ほど洗濯物を自室で干したのだが、改めて乾燥機の便利さを有り難く思った。

昨夜就寝前に、昨日の夕方に見ていた『野火』という映画について改めて考えを巡らせていた。昨日の日記に書いていないこととしては、作品の途中で出てきた教会のシーンが印象に残っている。銃弾が飛び交うような戦地のジャングルの中に、ポツリと古びた教会が映し出された時、そのシンボルの意味を思わず考えてしまったほどである。私はてっきり、主人公の田村はそこで祈りでも捧げるのかと思ったが、結局そこで田村は、後から入ってきた民間人のフィリピン女性を銃殺してしまう。

教会という聖なる空間で行われたその残虐な行為をみたときに、宗教の力について思いを巡らせずにはいられなかった。今も昔も、戦争の引き金や背後には宗教的な対立があり、そうした意味では宗教は戦争に力を貸しているように思える。しかしながら、実際の戦争の極限状態においては、宗教の本質的な力はあまり機能していないのではないかと思われることもある。もちろん、厚い信仰心を保持し続ける形で戦争に従事する兵士たちもたくさんいるだろう。だが、本来宗教が果たす霊的なものを敬う力に関して言えば、戦地の極限状態においてそれがどれだけ役割を果たしているのかは疑問である。

仮に田村がキリスト教徒ではなかったとしても、教会というシンボルが霊的な力を保ち、宗教的な役割を果たしていれば、教会という神聖な場で人が簡単に殺せるとは思わない。2019年の3月に、ニュージーランドの2つのモスクで発生した銃乱射事件について思い出す。そこでも神聖なモスクという場の中で残虐な殺害が行われた。

© YOHEI KATO 2020

目には見えない宗教の力の歪んだ形を見る。それはある環境の中で、ある人に対して機能することもあれば、別の環境の中で同一の人に対して機能するとは限らず、そもそも別の人であれば最初から機能しないこともある。その宗教を信仰していた人が、ある環境中で信仰の力を失ってしまうこともあれば、その宗教を信仰していない人が、ある特定の環境の中でその宗教の力を感じることもある。人そのものは本当に環境に埋め込まれた存在なのだとわかるし、宗教の力というのも環境によって強く左右されることが見えてくる。

もう1つ考えていたのは、レイテ島の中で日本兵の多くが精神的に狂気に陥っている中で、なぜ田村はそれに感染しなかったのかという点である。私たちの意識は集合意識から強く影響を受ける性質を持っているが、田村は集合の狂気に飲み込まれるギリギリのところで踏みとどまっていた。昨日の日記でも書き留めていたように、田村は文学を好んでいて、文学によって培われた何かしらの精神性が、集合意識への感染を防いだのだろうか。集合意識を超越することができれば、それに感染することを防げるのかもしれないということについてぼんやりと考えていた。フローニンゲン:2020/9/27(日)07:45

6263.『日本のいちばん長い日(2015)』を見て/メタ理論についての補足

時刻は午後3時半を迎えた。つい今し方、原田眞人監督の『日本のいちばん長い日(2015)』を見終えた。この作品は、半藤一利(はんどうかずとし)の『日本のいちばん長い日 決定版』を原作とし、1945年8月15日の終戦の日の舞台裏を描いたノンフィクション映画である。先日の、『野火』に続き、第二次世界大戦末期の日本を描いた作品を見た。

日本がポツダム宣言を受諾し、降伏へと至る過程の二転三転したプロセスを追体験しながら、陸軍や海軍の長のみならず、彼らの部下を含めた様々な当事者の視点になって映画を見ていくことを行っていた。この作品に対して何か感想を述べることは思いの外難しく、少し時間を置く必要がありそうだ。

明日は、『実録·連合赤軍　あさま山荘への道程(2007) 』か『父親たちの星条旗(2006)』を鑑賞しようと思う――後者のクリント·イーストウッド作品の後編に当たる『硫黄島からの手紙(2006)』も併せて見たい――。

人間とは一体どのような生き物であり、この社会は一体どのような場なのかということを、映画やドキュメンタリーを通じて探究していく。それは単なる知的な探究ではなく、実践的な探究であり、必ず何かしらの関与･介入に結びつくものとしてそうした探究を進めていく。映像を通じて、書物では得られないものが多分にあることに改めて気づく。

この10年ほどは、映画やドキュメンタリーを見ることはめっきり減っていた。思い出してみると、大学3年生と4年生の時にはかなり集中的に映画を見ており、1日に2、3本見るような日もあったように思う。そんな原体験があったことをすっかりと忘れていた。

発達とは、本当に回帰の道の上を歩くことなのだと知る。過去に熱を上げた対象への再燃がそこにあることもあれば、過去に捨て去ったものを拾うこともある。自分にとっては、日記を書くことや映画の鑑賞は前者であり、絵を描くことと曲を作ることは後者に該当する。

今日は午前中から午後にかけて、秋の対談講演会に向けた資料作りに励んでいた。創作活動としてのこの資料作りも楽しく行うことができていた。今日はこれからもう少し資料を作っていこう。おそらく本日中に大抵の内容を作り終えてしまうことができる。そうしたら来週の週末の両日を使って資料の細部を完成させていこうと思う。

昨日に、メタ理論の役割について考えていたように思う。現代社会を見渡してみると、人間同士の分断、人間と社会との分断、そしてそれ以外にも諸々の分断現象が見える。そうした分断の架け橋としての役割をメタ理論は果たしていく必要があるだろう。端的には、分断の乾いた溝を埋めていき、同時にそこに水と養分としての豊かな意味を与えることによって、間（あわい）を醸成し、そこから種々の創造や対話が生まれてくるようにしていくためのメタ理論が求められているように思う。

単なる現象説明や知的理解のためのメタ理論ではなく、とにかくこの社会をより良き方向に導いていくための実践的なメタ理論が求められる時代になってきている。そうした緊迫した空気をひしひしと感じる。フローニンゲン：2020/9/27（日）16:05

6264. ″This Giant Beast That is the Global Economy (2019)”の第4話を見て/マルクスの発達倫理

時刻は午後7時を迎えた。日曜日がゆっくりと終わりに近づいている。

昨日に引き続き、今日もとても肌寒い1日だった。明日もまた今日と同じような気温になるようだ。

結局のところ、自己という人間がどのような人間であるのかわからないから、そしてこの現代社会やリアリティが全くわからないから、書物だけではなく、映画やドキュメンタリーを見ることにしたのだと思う。映画やドキュメンタリーを意識的に見始めて日は浅いが、意識的にそうした映像を見ていくと、本当に多くの気づきを得ることができる。またそれは、単に情報次元で自分に刺激を与えているのではなく、感覚や感情の次元でも自分に刺激を与えていることに気づく。

近日中にクリント・イーストウッド監督の『父親たちの星条旗（2006）』や『硫黄島からの手紙（2006）』も見ていこうと思う。そして、それらの作品だけではなく、イーストウッド監督の一連の作品を集中的に見て、彼の問題意識や世界観を理解するように務めてみようと思う。

今日は映画以外にも、"This Giant Beast That is the Global Economy (2019)"の第4話を見た。本エピソードでは、AIを取り上げていた。1つとても印象的だったのは、AIによるフェイクニュースの醸成に関する話題である。もはやAI技術を活用すれば、ある人物に成り済ますことはいともたやすく行われてしまい、実際にAIを活用したオバマ元大統領の複製と本物が話をしている姿を見たときに、表情も声も区別が全くつかなかった。それを見て、今後こうした技術が悪用され、大統領や首相などの重要な人物を偽った者が政治的な発言を行い、経済が動転してしまったり、戦争が勃発してしまう危険性があるように思えた。

技術の進歩の恐ろしさは、技術を活用する人間の内面的成熟が一向に追いついていない状況でそれが活用されることにあるだろう。現代において、むしろ人間は内面的には退行・劣化している様を見ることができるため、なお一層のこと、技術の発展を競争的に推し進めていくことや、技術の発展を手放しに喜ぶ風潮は脅威に映る。

昨日はふと、ある1人の個人の自由な発達は、他の全ての人の自由な発達の条件でなければならないというマルクスの発達倫理について考えていた。マルクスは、ある個人の自由な発達が他の全ての人の自由な発達の制限になってはならず、また他の人の自由な発達がある個人の発達を阻害してはならないということを指摘していた。その観点で言えば、この社会で生きる人たちの全てが解放されなければ、真の自由はないということになり、その実現に向けて行動していくことが自己の真

の解放に近づいていく道だとも言えるのではないかと思う。よくよく考えてみればそれは当たり前のことであり、隣人が不自由さを被っていれば、それは物理的な次元や精神的な次元において何らかの形で自分に影響を与え、それが自分の自由を制限していることに気づく。縁起の思想のように、私たちは他との関係性があって初めて成り立つ存在であり、そうした関係性をもたらす他の存在が不自由を被っているのであれば、それは必ずや自己を不自由にさせるだろう。

明日はどのようなことを考え、どのようなことを感じるだろうか。明日に発見される自己と世界の新たな側面に思いを馳せながら、今夜はこれから少しばかり作曲実践をしたい。フローニンゲン:2020/9/27(日)19:30

6265. 今朝方の夢/美的体験の持つ性質

時刻は午前7時を迎えた。今、辺りがようやく少しずつ明るくなってきている。サマータイムの終了が待ち遠しいが、今年は10/25(日)にようやく終わる。まだサマータイムが継続していることに伴い、日の出の時間が遅くなる一方である。ここ最近は気温もめっきり低くなり、朝夕は随分と寒い。

昨日に引き続き、今朝もゆったりとした起床だった。一度午前2時半に目覚め、その時の目覚めが良かったので、そこから活動を始めてもよかったのではないかと今になって思う。仮に明日それくらいの時間に目が覚めたら、そこでもう起床してしまおうと思う。

今朝方も夢を見ていてのは確かだが、その記憶はほとんどない。肯定的な感情をもたらす夢だったことは覚えている。場面で覚えていることがあるとすれば、私は立派なホテルの中にいて、ホテルの中を歩き回っていたことだ。そういえば、そのホテルの廊下には絵画がびっしりと飾られていて、美術館さながらの雰囲気を持っていたことを覚えている。

私の部屋の前にもいくつもの絵画作品が飾られていて、ちょうど中国人の家族が作品を見ていた。そこで小さな男の子がどういうわけか、持っていた鉛筆かペンか何かで私の部屋のドアに落書きを始めた私は急いで彼を止め、落書きを見てみると、それは落書きというよりも、ドアに彫られたメッセージか何かだった。それは暗号のようなメッセージであり、意味はわからなかった。そのような夢の場面があったのを覚えている。

その他にも、母方の祖母の家に訪れたのを覚えている。最初私は1人で母方の祖母の家に泊まっており、しばらくして祖母、母、叔父が帰ってきた。私は早々と午後の6時過ぎに就寝していたようであり、3人が帰ってきたのは午後7時頃だった。3人は、私がそんなに早く就寝していたことに驚いているようだったし、私も3人がそんなに早く帰ってくるとは思ってもみなかった。

3人が帰ってきたところで夕食をみんなで食べようということになった。私は先ほどまで寝ていたこともあり、あんまりお腹が空いていなかったが、野菜や果物などの軽いものもあると祖母が教えてくれたので、私はそうしたものを食べることにした。そこからは4人で夕食を楽しんだ。そのような夢の場面もあったのを覚えている。

今、小鳥たちが元気良く鳴き声を上げている。昨日の感じとはまた違う。昨日は、1羽か、2羽ぐらいの小鳥たちが静かに鳴き声を上げていたが、打って変わって今日は大合唱である。

美的体験が持つ未知なる自己と未知なる世界に触れる感覚、そして自己を超えていく感覚。それは発達を後押しする知覚体験だろうということについて昨日考えていた。つまるところ、美的体験には未知性と超越性の双方がある。ジョン･デューイが指摘するように、美的体験の質はコミュニケーションによって深まっていく。美的体験をもたらすものとの対話、さらにはそうした体験をもとに他者と対話をすることによって、美的体験の質が深まっていき、それは美的経験に昇華され、自己を深めていく。今日もまた小さな美的体験を積み重ねていく素晴らしい1日になるだろう。フローニンゲン:2020/9/28(月)07:34

6266.『実録･連合赤軍　あさま山荘への道程(2008) 』を見て

時刻は午後3時半を迎えた。今日もまた午後から映画を1本見た。先ほどまで見ていたのは、若松孝二監督の『実録･連合赤軍　あさま山荘への道程(2008) 』という映画である。ここ数日見ている映画と同様に、今の自分の知識、そして自分が生まれてからの時代情勢などを考えると、理解が難しい部分も多々あったが、多くのことを考えさせられる優れた作品であったことは間違いない。

この作品が取り上げている「あさま山荘事件(1972)」については日本史を通じて名前を知っているぐらいの知識しかなく、この作品を通じて、この事件がいかなる時代背景により、いかなる思想によってもたらされ、そしてどのようなプロセスで事件にまで至ったのかについて多くを知った。

米国ではベトナム戦争、フランスではパリの5月革命、中国では中国文化大革命など、世界中が騒乱の中にあった1960年代。日本においても学生運動が高まり、連合赤軍が結成された。ちょうど先日、自らの政治思想がいかなるものなのかを考える瞬間が訪れ、これまで見えていなかった自分の思想が浮き彫りになってきた。現代に生きる今の自分が客観的な視点で連合赤軍の思想や行動を見ると、それが極端なものであり、非常に歪なもののように映る。しかしながら、彼らが究極的な理想を掲げて生きていた姿や、当時の社会構造を変革しようと志す点に共感している自分もいたことは確かである。私の世代においては「革命」なる言葉は完全に死語になっていたが、彼らが母国の状況と仕組みを憂い、それをなんとかしようと立ち上がった点にやはり共感の念を持つ。

映画の中で、「総括」という名の下に、連合赤軍のメンバー間で激しいリンチが行われ、死者が続々と生まれる描写は印象的であり、それは何か、オウム真理教における「ポア」という思想のもとに行われた虐殺を思い起こさせた。映画の中で描かれていたように、連合赤軍のメンバーがどんどんと狂信化していく中で、「総括」という行為に疑問を持つ者も生まれていた。だが、カルト宗教の狂信化のメカニズムと同じようなものが連合赤軍でも働いており、活動に少しでも疑問を呈するものは次々に殺されていった。そうしたシーンはとても残虐であり、同時に思想の狂信化はこうした行為も正当化してしまうほどの力を持つのだということを改めて思った。

最後に浅間山荘に立て篭る状況の前からすでにメンバーの人数も減り、物資も尽きつつある中で、彼らの革命が実現しえないものであることをメンバーも気付き始めていただろう。しかし、だからこそ彼らの理想はより純化し、より高まっていき、物理的な次元の状況が見えなくなってしまっていたのではないかということも感じさせられた。

彼らのような純粋な理想を抱けなくなっているような現代社会。そして彼らのように社会を変革するべく行動を起こすことができなくなっているような現代社会。そうした現代社会の姿を見ると、当時と今を比較して、果たして社会はどれほど発達したと言えるのだろうか。また、社会で生きる個人としてどれだけ成熟を遂げたのだろうか、という問いを投げかけさせてくれるような作品であった。今、変革を迫られる対象は彼らが敵視していた国家権力だけなのだろうか。個人そのもの、国家、そしてそれら以外にも変革を迫られているものが多々あるように思えてくる。

© YOHEI KATO 2020

作中、ある登場人物が「総括の意味がもはや分からなくなってきている…」と述べていたことがとても印象的だ。私たち現代人にとって総括とは何なのだろうか。私たちが果たすべき総括というものがあるのではないだろうか。彼らは総括を歪んだ自己批判の精神で行っていた。発達とは、絶え間ない健全な自己批判を通じて実現されるという性質を考えると、個人と社会の変容の実現において、連合赤軍が行ったのとは違う形での自己批判を自己及び社会に投げかけていくことが要求されているのではないかと思う。フローニンゲン：2020/9/28（月）16:01

6267. 若松孝二監督の他の作品への関心

時刻は午後4時を迎えた。改めて、若松孝二監督の『実録･連合赤軍　あさま山荘への道程（2008）』という映画はとても素晴らしかったことが実感される。素晴らしい映画は世界観を大きく変え、自己と社会を見る眼を変容させてしまうというのは本当かと思う。

若松監督の近年の作品である『キャタピラー（2010）』『海燕ホテル･ブルー（2012）』『11･25自決の日三島由紀夫と若者たち（2012年）』『千年の愉楽（2012）』という一連の作品をまた見ていこうと思う。学術書や学術論文と同じで、ある1つの作品を起点にして、集中的にその作者の仕事を辿ったり、そこから思わぬ形で関心が広がり、数多くの作品に出会っていくプロセスは映画でも同じなのだということが実感される。

今日は午前中に、ロイ･バスカーの書籍を再読した。映画やドキュメンタリーを紐解いていく際に、できるだけこれまでの自分の専門領域の観点を用いないようにすることによって、自分の関心をさらに広げるようにしている。ところが、自分の専門領域の観点を封印すると、知識と観点の不足を痛感するという状況に置かれる。だがそれによって、これまで自分が学習捨象してきた領域が浮かび上がってくる。

そのような形で浮かび上がってきた領域の中でも、今自分が関心を持っているのは社会学と政治学であり、それらの学問領域から映画を紐解いている専門書を近い将来に購入しようと思う。また、とりわけ後者に関しては知識そのものの土台を構築していくことが必要であり、今朝方の文献調査の際に、いくつか読んでおきたい書籍を見つけた。

いつもながらであるが、ある対象領域について第一線級の研究者たちが何をどのように研究し、それらの研究がいかなる歴史や背景のもとに成立しているのか、そしてその領域の最先端の学説を知る上で、いつもオックスフォード大学とケンブリッジ大学のHandbookシリーズを購入するようにしている。今回もまた、政治学に関しては、下記の書籍の購入を検討している。

- The Oxford Handbook of Political Ideologies
- The Oxford Handbook of Political Science
- The Oxford Handbook of Comparative Politics
- Political Philosophy: The Essential Texts 3rd edition
- The Oxford Handbook of Political Philosophy
- The New Handbook of Political Sociology

それらに合わせて、同大学出版から出版されている政治学と社会学の百科事典を購入しよう。今リストアップされている映画評論に関する35冊の洋書の中から、どれだけのものを購入するか分からないが、日本から帰ってきてからの探究の方向性は随分と明確なものになってきている。フローニンゲン:2020/9/28(月)16:22

6268. "This Giant Beast That is the Global Economy (2019)"の第5話を見て

時刻は午後7時半を迎えた。先ほど、"This Giant Beast That is the Global Economy (2019)"の第5話を見終えた。今回のエピソードは死と経済に関するものだった。昨日のAIと経済のエピソードに引き続き、今回もまた色々と考えさせられるエピソードであった。まず今回のエピソードでは、地下経済的な側面から死を取り上げていた。

わかりやすい例で言えば、人殺しビジネスであり、今回もこのビジネスに関する元潜入捜査官が登場し、裏話を色々と語っていた。そこからは、製造物責任リスクの観点を無視するような形で作られていく製品を取り上げていき、そこでは人の生命が完全に無価値のようなものとして扱われていることに驚いた。もっと言えば、ある業界において、ある製品に安全装置を取り付ける費用と、それを取り付けなかったことに伴う諸々の損失(例:訴訟費用など)を比較し、安全上危険とわかっていながら安全装置を取り付けないというような意思決定が日常茶飯事で行われていることに驚いた。

そこからは葬式ビジネスの話題に移っていった。米国では150年前は、亡くなった人を家族で弔う習慣があったが、資本主義の台頭により、ここでもまた人間の生命──亡くなった人──が商品化され、形骸化した形で人を弔う行事が行われることになったことが描かれている。

仏陀の本来の思想は葬式の否定だったはずなのだが、いつの間にか日本でも葬式は1つの大きなビジネスになってしまっている。とりわけ葬式については、以前から少し考えていたテーマであり、自分がこの世から去った場合には、世間で一般的に行われているような葬式を決してするなと親族には伝えるだろう。これは亡くなった人との別れの儀式を否定しているのでは全くなく、むしろ逆に、もっと意味のある形で弔う方法があるのではないかという問いかけをしている。見も知らぬ人間に弔いの儀式を外注するのではなく、親族同士でもっと時間をかけて、もっと別の方法で死者と別れる方法がきっとあるであろう。

生と死の取り扱いに関する現代社会の腐敗ぶりは凄まじいものがあるということを教えてくれるエピソードだった。もはや人間の命が商品化されているだけではなく、死そのものも商品化の対象なのだ。こうなってくると、何から何まで商品化され、金銭価値に換算されるような地獄絵図が浮かび上がってくる。

死に関する経済についての書籍を検索してみたところ、ほとんど書籍が見つからなかった。今のところ、“Economies of Death: Economic logics of killable life and grievable death (2015)”と“ The economy of death (1969)”という書籍を見つけたが、それらは葬式ビジネスを含めた、死に関するビジネスの裏について説明したものではなさそうだが、一応購入予定の文献リストに加えておいた。明日は、第6話のエピソードを視聴する。フローニンゲン：2020/9/28（月）19:53

6269. 今朝方の夢

時刻は午前6時に近づこうとしている。どうやら昨夜は小雨が降ったらしく、窓ガラスに雨滴が付着している。今朝もまた肌寒いが、今は書斎と寝室の窓を開けて換気をしている。

今日は午前中から午後にかけて小雨が断続的に降るようなので、買い物は夕方にしようと思う。来週はもう日本に向けて出発する頃であるから、今日の買い物を終えたら、出発日から逆算して必要なものを購入していくようにしたい。

今朝方はいくつか印象に残る夢の場面があった。夢の中で私は、実際に通っていた中学校の教室にいた。そこは確かに自分が通っていた中学校だったのだが、教師にいたのは小学校6年生の時

にお世話になった先生だった。先生は、これから国語の授業を行うと述べた。私は別の授業を受ける必要があると気づき、先生にそれを告げて教室を出ようとした。

すると、2人の友人（FK & KS）も私と同じ授業を受けるようであり、3人で一緒に教室を出た。教室を出ると、廊下で何かゲームが行われていた。そこでは男子生徒たちがボールか何かを廊下で転がして行うゲームが行われていたのである。私もそのゲームに加わろうか迷ったが、次の授業があるのでその教室に向かうことを優先させた。

ところが、次の授業が突然キャンセルになったという情報をテレパシーのような形で得たので、2人の友人にそれを告げ、私たちは再び元の教室に戻ることにした。教室の扉を開けると、もうそこには先生はいなかった。その代わりに、ある著名の日本人科学者が教壇に立っていた。その方が今面白い授業を行なっているようだった。黒板の上からスクリーンを下ろし、そこにPPTの資料が映されていて、その方が発明した面白い物が紹介されていた。その中でも1つ面白いと思ったのは、動画を用いて人間の認識を一発で大きく変えるという発明品だった。

次の夢の場面では、現在協働しているある方と自分の家でイベントを行うことになっていた。自宅の前は工場のようになっていて、工場の入り口付近にイベントの受付があった。協働者のその方は、私のブログを読んでくださっているようであり、ブログ記事がプリントアウトされた物が入り口付近に置いてあった。見ると、一連の記事の中でナンバリングがおかしな物があり、当時もそれに気づきながらも、修正するのが面倒だったのでそのままにしていたことをふと思い出した。

肝心のイベントが行われる場所は、高校時代を過ごしていた社宅の自分の部屋だった。すでに部屋にやってきた年配の男性に、部屋を掃除した方がいいと開口一番言われてしまった。部屋を見渡すと、確かにその通りだと思った。特に畳を見ると埃が溜まっていて、そこに芋虫やキリギリスのような虫が動いていた。

早速私は掃除をかけることにし、埃だけではなく、畳にいた虫たちを含め、一気に様々なものを掃除機で吸い上げた。すると、これからイベントを行う場所は自分の部屋だと思っていたが、サンフランシスコ時代のルームシェアリングをしていた家ではないかと思い、ルームメイトのスコットに事前に連絡をしておく必要があると思った。彼はまだサンフランシスコ市内の銀行で勤務している時間で

あり、今から連絡をすれば、彼が帰ってくるまでに事情を説明できると思った。すぐさま連絡をしようとしたところで夢の場面が変わった。フローニンゲン：2020/9/29（火）06:08

6270. 日本への一時帰国に向けて

時刻は午前6時を迎えた。数日前より、本格的に映画やドキュメンタリーを見るようにし始めてから、日々の生活がさらに充実したものになっているように思う。そうした映像作品は、単に自分の知らない世界を教えてくれるだけではなく、ムービーヨガの実践にあるように、映像作品は自己の世界観や感覚を変容させてくれることや、自己に治癒をもたらしてくれることがある。映像作品を見ることを通じて、大なり小なり、そうした変容や治癒は常に起こっている。

今日は、クリント・イーストウッド監督の『父親たちの星条旗 ″Flags of Our Fathers (2006)”』を鑑賞しようと思う。しばらくは、人間心理の深層や社会の深層を描くような作品を中心に鑑賞していこうと思う。そうした作品に加えて、人間や人間社会の未来を描くような作品についても見ていこう。映像作品を通じて、それらの主題についての理解を深めていくことを継続させていく。

日本への一時帰国はいよいよ来週に迫ってきた。一時帰国に向けて、今週中に、実家に滞在して以降の旅の最中で宿泊するホテルの予約をしておこうと思う。実家を訪れてからは、京都、東京、大阪、和歌山、石川、東京、福井、大阪という順番で巡り、同じ都道府県に2度ほど足を運ぶこともある。協働者の方に宿泊先を確保してもらっているのは最初の東京と最初の大阪および和歌山、そして2度目の東京なので、京都、石川、福井、そしてオランダに戻る前日に訪れる大阪のホテルを予約しておきたい。

4箇所のホテルを自分で予約することになるので、今週の木曜日と日曜日の2回に分けて予約を行ってもいいかもしれない。ホテルの予約が完了すれば、日本への一時帰国に向けての準備はほぼ完了である。あとは来週にでもKLMに連絡をし、機内食をベジタリアン食にしてもらおうと思う。自宅にいる時は完全にベジタリアン食を毎日食べており、外食をする際にも野菜料理があればそちらを選ぶようにしているが、魚であれば許容しているため、厳格なベジタリアンというわけでもない。ただし、この1年間は魚を一度も食べていないので、基本は厳格なベジタリアン食を日々食べている。

今回のフライトに際して、機内食をどうするかを色々と考え、魚料理を食べることを検討したが、やはりベジタリアン食を事前にオーダーしておこうと思う。KLMのビジネスクラスのベジタリアン食がどのようなものかを実際に食べて確認し、今後の機内食選択の参考にしたい。いつもはフライトの中で本を読むか、パソコンで仕事をするか、はたまた作曲実践をするかの形で時間を過ごしている。だが今回からは、機内エンターテイメントを通じて映画やドキュメンタリーを視聴しようと思う。

今回はアムステルダムから関空に直通の便だが、それでも11時間ほどのフライト時間だ。機内では日記を書いたり、作曲をしたりしようと考えていて、11時間あれば2つぐらい映画作品を見ることができるのではないかと思う。

今から2年前に日本に一時帰国した際には、行きの便でほとんど睡眠を取らず、成田空港に到着して高速バスを待っている時に幻聴が聞こえ始め、最初に滞在していた東京で体調を崩してしまったことがあるので、それ以降は機内で必要な睡眠を取ることにしている。今回は乗り換えがない分随分と楽だが、それでも機内での睡眠はしっかり取りたいと思う。近日中に、機内で鑑賞する映画やドキュメンタリー作品について調べておこうと思う。フローニンゲン：2020/9/29（火）06:29

6271. 発見される美/解釈と創作/エコエティカと積極的・創造的な倫理的実践

――全ての実践学は、ただ善を認識するためにだけ営まれるのではなく、何らかの行為をもって善を実現するための認識でなければならない――ジャック・マリタン

時刻は午前9時を迎えた。早朝に、いつものように音の詩を作ることを楽しんでいた。

作曲とは詩作である。同時にそれは、言葉を媒介させない思索行為でもある。そのようなことを思いながら毎日作曲実践に従事している。自己と世界との照応によって立ち現れた思考や感覚を絶えず形にしていくこと。それが自分という固有の人間に与えられた使命である。言葉・音・絵の形にしていくことを今日もこれから引き続き行なっていく。

単に感覚的に把握される美があるだけではなく、情緒や知性を育まなければ見えてこない美が存在することについて改めて考えていた。美を把握する力の発達という現象は確かに存在しており、感覚的に把握するよりも遥かに高く深い美が存在しているということを思う。感性や知性を発揮する

ことによって発見される美は、己の内的成熟に応じて高まっていき、深まっていくものであり、内的成熟に応じて世界との照応も変わってくるということを忘れないようにする。

プラトンは、解釈を創作に他ならないとみなしていた。その観点において、芸術作品や映画作品を自分なりに解釈することは創作の一部だと考えることができそうだ。

今日も午後に映画を1本見る予定だが、鑑賞という行為に解釈を伴わせて積極的に関与していくことができたのであれば、それもまた創作行為なのだ。午後に映画を見た後には、自分なりに感じたことや見出したことなどを含めた解釈を書き留めておこう。創作されたものに対して解釈を加えることが、その作品を新たに創作し直すことであり、同時に自分なりの新たなものを創作することになるということ。それを絶えず念頭に置いておく。

日本に一時帰国した際には、今道先生のエコエティカに関する書籍を読む予定だ。それはオランダにもって帰ってこようと思う。今道先生のエコエティカという思想は、人間の生息圏の規模で考える倫理のことを指す。人類の生息圏、おそらくそこには他の生命も含まれることになるであろうから、生物圏を深く考慮に入れた倫理思想だと言えるだろう。そうした倫理思想と倫理的実践は、まさに自分の関心事項である。

単なる確認項目としての倫理ではなく、創造的かつ積極的な倫理があるはずであり、そうした倫理こそがこの現代社会で求められているのではないだろうか。企業におけるコーポレートガバナンスなども単なる倫理的なチェックで終わらさせていいはずはなく、もっと積極的な創造的な倫理的実践に乗り出していく必要性を感じる。それは企業社会だけではなく、教育や医療、そして政治などを含めて大事なことのように思えてくる。フローニンゲン：2020/9/29（火）09:16

6272.『父親たちの星条旗 “Flags of Our Fathers (2006)”』と”This Giant Beast That is the Global Economy (2019)”の第7話を見て

時刻は午後8時を迎えようとしている。今日は午後に、クリント･イーストウッド監督の『父親たちの星条旗 “Flags of Our Fathers (2006)”』を見た。この作品は、太平洋戦争最大の激戦だと言われる硫黄島の戦いを日米双方の視点から描いている2部作のうちの前半の作品だ。本作は、アメリカ側の視点から描かれている。

物語は、硫黄島の山に星条旗を打ち立てた6人の兵士の写真の真実と、生き残って戦場からアメリカに戻ってきた3人のその後の人生を描いている。イーストウッド監督の作品らしく、勧善懲悪に陥ることなく、様々な観点から人や状況を描いていこうとする姿勢が本作の中にも見られた。

戦争と経済が密接につながっていることは今に始まったことではなく、人類の歴史の中で戦争が始まった頃からそうしたつながりがあったのだと思われるが、本作品の中でも、帰還した英雄たちが国のために国債を買ってくれと民衆たちにPRさせられることを強要されているシーンが印象に残っている。本作において最も印象に残っているのはやはりラストシーンだろうか。ラストシーンでの描写と言葉から、結局のところ人は、国家とか、そんな姿形のよく分からないもののために戦うことなどできないということを考えさせられた。うわべでそのようなことを述べることができたとしても、本質的にはそんなことはできず、最終的には身近な者、仲間のためにしか戦うことができないのではないかと思ったのである。「国のため」という言葉が自己の実存にどこまで刺さるものなのかを問われると極めて怪しい。

明日は2部作のうちの後半の作品であり、日本側からの視点で硫黄島の戦いを描いた『硫黄島からの手紙 “Letters from Iwo Jima (2006)”』を見る予定だ。今日はその他にも、ドキュメンタリーとしては、ここ最近毎日見ている″This Giant Beast That is the Global Economy (2019)”の第7話を見た。本エピソードの話題は、ゴールドと経済である。

ロンドンでゴールドを扱う売人、貨幣経済から完全に脱却し、アメリカの田舎で自給自足を行う夫婦、インドを含め、賄賂が経済に与える影響の話、そしてビットコインなどの暗号資産に関する話題が取り上げられていた。とりわけ私は暗号資産についてはこの6年間ずっと関心を持ち続けており、それを資産ポートフォリオにも組み込んでいることもあり、その話題については知っていることが多かったが、そこからまた色々と今後の暗号資産マーケットの動きとその実社会での適用について考えさせられることがあった。エピソードはまだ続き、明日は第8話を見ていこうと思う。

今日も実感したが、映画やドキュメンタリーの鑑賞を通じて、日々異なるリアリティに参入し、そこから日常のリアリティに戻ってくることによって、リアリティが変容している感覚がある。別の言い方で言えば、異なるリアリティに参入し、そこから再びこれまでのリアリティに戻ってきた時に、そこでのリアリティが拡張されている感覚があるのだ。

映画やドキュメンタリーを通じて多様なリアリティにアクセスし、そこから日常のリアリティに戻ってくるという往復運動を続けていくと、どのような認識世界が開かれていくのだろうかという関心がある。明日からも引き続き、映画やドキュメンタリーを見ながら、長期的な観点でその関心事項を検証していこうと思う。フローニンゲン：2020/9/29（火）20:17

6273. 存在論的単価/共存在感覚/創造的な営みとしての学習

時刻は午前5時を迎えた。この時間は辺りは真っ暗であり、書斎の窓を明けていると大変冷たい空気が入ってくる。

早いもので、来週の今日は日本に向けて出発する。今回の一時帰国に際して、和書を結構な数オランダに持って帰ろうと思っており、大きいスーツケースを持っていこうかと今朝方思った。ここ数年は、機内持ち込み用のスーツケースだけを持って日本に帰るようにしており、とても身軽だった。チェックインカウンターでスーツケースを預ける必要もなく、空港到着の際にベルトコンベアーでスーツケースを待つ必要もなかった。時間の観点で言えば、それはとても効率が良く、現地に到着してからの移動も身軽であった。

ところが今回は、スーツを2着とビジネスシューズ1着を持参する必要があり、オランダに持って帰りたい書籍の数も多いため、少し大きめのスーツケースを持って帰ることが賢明なように思えてきたのである。今のところ大きめのスーツケースを持って帰る方向でいて、前日に荷造りをする際に最終的な判断をしようと思う。もし仮に大きめのスーツケースを持って帰るとすれば、帰りのオランダの空港でベルトコンベアーからスーツケースが出てくるのを待たなければならないので、そうした時間を考えると、空港のホテルで2泊し、アムステルダムの美術館を巡るという当初の計画を実行してもいいかもしれない。

昨日もまた雑多なことを考えていた。それらを備忘録がてらまとめておきたい。まず1つに、霊性や精神を活現させていくことの大切さについてである。抑圧された霊性と精神を解放し、その逆りを後押しすること。霊性や精神は目には見えないものだが、そうしたものを即座に否定することは、ロイ・バスカーの言葉で言えば「存在論的単価（ontological monovalence）」の過ちを犯していると言えるだろう。霊性や精神以外にも、現象を引き起こすメカニズムや力も往々にして目には見えず、そうし

たものを否定することや見えないこともまた存在論的単価の過ちである。簡単に言えば、この誤謬は、そこに存在するものしか見ないこと、あるいは認識できるものしか認識しようとしないことを指す。

不在のものを絶えず見つめる眼差しを持っておくこと。未知なるものに開かれた目を絶えず持っておくこと。そして、存在論的単価の過ちを犯している事態を見抜く目を持つこと。それらの大切さについて考えていた。

2つ目として考えていたのは、バスカーが述べる「共存在感覚(co-presence)」についてである。共存在感覚というのは、夜空を仰ぎ見た時に見える星々が自分の外側に広がっていながらも、同時に自分の内側に広がっているという感覚である。私たちは、お互いにそうした感覚を持ち合って日々を生きているだろうか。他の生物･無生物たちに対してこうした共存在感覚を抱けているのだろうか。それは私たちに本来備わっている感覚のはずであり、発達可能な感覚なのだ。

そのようなことを考えながら、3つ目の話題について考えていた。それは、学習というのは、知識を取り入れる活動というよりもむしろ、知識を創造する活動であるということについてである。端的には学習とは、既存の知識を取り入れながらにして新たな知識を創造する営みと言った方が正確だろうか。学習とは兎にも角にも創造的な営みなのである。それを忘れた学習観や学習実践が多いすぎやしないだろうか。そのような問題意識を持っている。フローニンゲン:2020/9/30(水)05:27

6274. 創作活動に関して

時刻は午前5時半を迎えた。昨日は、クリント･イーストウッド監督の『父親たちの星条旗 “Flags of Our Fathers (2006)”』を見たので、今日は硫黄島2部作の後編に当たる『硫黄島からの手紙 “Letters from Iwo Jima (2006)”』を見ようと思う。ここ最近は毎日映画を1本見て、ドキュメンタリー番組も1つか2つほどのエピソードを見ることができている。それでいて毎日1、2冊ほど書籍を再読することを行っていて、創作活動も一定量の実践が行えている。学習と実践の境目はもうほとんどないのだが、多岐に渡る学習と実践がとても良い関係性の中で進められているのを実感する。

今日は、8月の初旬から取り掛かっていた、アーノルド･ショーンバーグがハーモニーついて執筆した書籍“Theory of Harmony”の1巡目がようやく終わる。この書籍は450ページほどあり、掲載されて

いる譜例の数が多かったのだが、毎日コツコツと譜例を写経し、それをもとに小さな曲を作るということを水の如く淡々と進めていたところ、ようやくもって本日その1巡目が終わる。

日々小さく進むこと。そしてそれを継続させていくことの大切さを改めて知る。とにかく小さな前進を日々続けていくことをこれからも大切にしていく。

一昨日にふと、人生これから色々なことがあると思うが、創作活動が自分を支えてくれるという確信が芽生えた。日記を執筆すること、曲を作ること、絵を描くこと。それらの創作活動は、心の癒しと変容を大きく後押ししてくれていて、創作活動そのものが一生涯の無形の財産となり、自分を支え続けてくれるだろう。それは実存的･霊的な財産になる。

創作活動と自己超越欲求の結びつき、さらには自我の究極的な欲求である自己永遠化の欲求との結びつきについて昨夜考えていた。自分がこうも何かに駆り立てられるようにして日々創作活動を行っているのは、そうした欲求を持つ自分がいるのかもしれない。とは言え、今の私はまだ本腰を入れて創作活動をしていない。仮に本腰を入れて創作活動をしているのであれば、1日に10曲程度、絵を4~5枚程度しか作らないはずがない。少なくても15曲、絵に関してもさらに2倍ほど描くことができるだろう。

今はまだゆっくりとした助走期間なのである。一生涯創作活動を続けていくためには、今のように創作欲求が飢餓感を持つぐらいがちょうどいいのかもしれない。その一方で、ここからどこかの時期に集中的に創作活動に励むこともあるだろう。その際には一般的な形で営まれる社会生活を営むことはしない。それに向けた精神的･物理的･環境的な準備は着々と進みつつある。

本日ショーンバーグの書籍の1巡目を終えたら、今度は“Other Harmony: Beyond Tonal and Atonal”という書籍に取り掛かろうかと考えている。こちらは、ショーンバーグの書籍に比べれば譜例が少ないので、1巡目は早く終わるかもしれない。

作曲実践に伴う顕教として、音楽理論と作曲理論に関する専門書をできるだけ幅広く読み、繰り返し読むことを通じて肉厚な知識を得ていく。そして、作曲実践に伴う密教として、専門書に掲載されている譜例をもとにとにかく実際に曲を作っていき、技術の鍛錬に励む。1つの目安として、あと4年後に自分がどうなっているのかを見るのが今から楽しみである。同時に、芸事は長大な時間をかけ

て、それこそ文字通り一生涯をかけて切磋琢磨と精進を重ねていくものであることを念頭に置いて、ゆっくりとだが着実な歩みを進めていきたいと思う。フローニンゲン：2020/9/30（水）05:52

6275.「在ることを在る経験」/保留の感覚/今朝方の夢

時刻は午前6時に近づこうとしている。真っ暗な外の世界を眺めながら、引き続き日記を書いている。日記を書くこと、曲を作ること、絵を描くこと、読書をすること、映画やドキュメンタリーを見ること。それらが今の自分の日常を形成している。そこに時折協働プロジェクト関係の仕事に従事する時間を設けるようにしているが、近い将来は前者の取り組みにより時間を充てることになるだろう。前者の取り組みに従事している時こそ、自己という存在が活現しているように感じる。

自己を活現させてくれる取り組み以外は断固として従事せず、自己を活現させてくれる取り組みだけに従事していく。そうした取り組みだけでもどれだけ幅が広いだろうか。

思考を通じてそこに在ることを理解するのではなく、在ることを在る経験（experience of being being）を通じてそれを実感していく。在ることを在るという経験を、果たして私たちはどれだけ積めているだろうか。そうした経験や自己を活現させてくれる経験の欠落した人生とは一体どのような人生なのだろうか。機械化･ゾンビ化といった非人間化の進む社会の中でそのような問いが芽生える。

「私たちは思考を通じて学ぶというのではなく、むしろ思考の保留から学ぶ」というロイ･バスカーの指摘について考えを巡らせる。創造的な生き物である私たちは、思考の流れの外にある自発性を司る流れを通じて学びを深めていく。そうした流れに参入するためには、思考の流れそのものを保留するという態度、あるいはそこにうかつに入っていかないとするような態度が求められる。

昨日もある協働者の方とオンラインミーティングをしているときに、非言語的な創作活動を通じての言語束縛からの解放について話をしていた。曲を作っているとき、そして絵を描いているときの「保留の感覚（sense of suspension）」を大切にしよう。それこそが治癒と変容をもたらす間（あわい）をもたらしてくれるのだ。

それでは今朝方の夢について振り返り、早朝の創作活動に励んでいこう。自分はまだ何も創作活動を始めていないという初心が絶えず内側に存在していることは良いことだろう。もっとである。もっ

と作ることを促す抑えがたい衝動が自分の内側にあるが、そうした衝動を人生の最後の瞬間まで抱き続けるために、今はその衝動に完全に従うのではなく、あえてそうした衝動が創作への飢餓感をもたらすにように、その衝動と対話をし、寄り添うことを大切にしている。

夢の中で私は、不思議な空間にいた。目の前には、最終地点が見えないような巨大なエスカレーターがあった。私の右隣を見ると、小中学校時代の友人（RS）がいた。彼と一緒に、無言でエスカレーターの上の方をぼんやりと眺めていると、私たちに声をかけてくる人たちがいた。振り返ると、そこには小中学校時代の友人が3人いた（YK & SH & NI）。3人のうち2人は男友達であり、もう1人は女友達であった。

彼らはこれから高速のエスカレーターに乗って、私たちにクイズを出すと言う。それはどんなクイズかと言うと、彼らが手に持っているネクタイの色と特徴を当てていくものだった。どうやってそのクイズが進行するのかを尋ねてみたところ、彼らが持っているネクタイがエスカレーターの足場に映し出されるとのことであり、それを見て色や形のパターンを把握し、仲間外れの3つのパターンを当てるという内容とのことだった。

動体視力が試されるような面白いクイズだと私は思い、学年でも5本の指に入るぐらいの運動神経の良い友人とそれに取り組むことが楽しみになってきた。いざそのクイズを始めてみると、3人は順番にエスカレーターに飛び乗っていった。すると、ただでさえ速かったエスカレーターの速度が尋常ではないほど早くなり、彼の足元に光るネクタイの色と形のパターンが私にはほぼ全く捉えることができなかった。横にいた友人も同様のようだった。

最初の挑戦において、クイズはあっけなく失敗し、私たちもエスカレーターに乗って上に向かった。すると、やはりあまりにも速くエスカレーターが動いたようだったので、女友達が足を捻挫してしまったようだった。彼女は来月に何かの競技の大会に出場するとのことであり、私は彼女の怪我を心配に思った。すると、そこから時間が飛び、彼女は足に包帯を巻いていながらも、捻挫は2週間ほどで完治すると私に教えてくれた。それを聞いたとき、私はほっとした。

次の夢の場面で覚えていることは少なく、中学校時代にお世話になっていた女性の数学の先生が夢の中に出てきていたことぐらいしか覚えていない。先生と笑いながら何かの話題について話をし

ていた。最後の夢の場面では、私は実際に通っていた中学校の校庭にいた。より具体的には、バスケットコートの上にいた。周りを見渡すと、部活の同学年のメンバーたちと後輩がたくさんそこにいた。私はキャプテンを務めており、副キャプテンの友人が早く練習を始めたそうにしていたので、2分後から全体練習をすることを全員に呼びかけた。

2分間のウォーミングアップとして、私はある親友(KF)と1on1をすることにした。いざ1on1を始めると、どういうわけかドリブルのコントロールが狂いがちであり、危うく彼にボールを取られそうになることが何回かあった。しかし、徐々にボールが手についてきて、そこからはダンクシュートを何回か決める形で彼に勝利した。今朝方はそのような夢を見ていた。フローニンゲン:2020/9/30(水)06:20

6276.『硫黄島からの手紙 “Letters from Iwo Jima (2006)”』を見て

時刻は午後7時半に近づきつつある。今日は日中に少しばかり晴れ間が顔を覗かせたが、1日を通して曇りがちの日であった。そんな本日に映画を2本ほど見た。最初に見たのは、『硫黄島からの手紙 “Letters from Iwo Jima (2006)”』である。硫黄島の戦いを描いた2部作の前編である『父親たちの星条旗 “Flags of Our Fathers (2006)”』は昨日に鑑賞し、本日はその後編である。

今回の作品は、日本兵側の姿を描写している。鑑賞しながら思っていたのだが、これが日本人監督ではなく、アメリカ人監督が作ったものであるということに驚いた。その驚きは、観点の公平性、ないしはアメリカ人監督から見て外の存在であるはずの日本を内側から視点を取って見事に描いていたことにある。発達理論の観点で言えば、イーストウッド監督の視点取得能力の発達段階は高度であり、幅と深さのある観点を取得できる監督なのだということを改めて思った。

それを具体的に表すシーンが随所に本作品にも見られた。多様な観点を取り、それでいて観点中立的な姿勢を持つというのは、インテグラル理論で言えばグリーン的、あるいは相対主義的段階のそれのように映るかもしれないが、イーストウッド監督の作品にはどこか一貫した信念のようなものが貫かれており、多様な観点を取りながらも、それらを超越する1つの思想ないしは主張のようなものが根底に存在しているように思えるその観点において言えば、イーストウッド監督はティール的な発達段階を体現していると言えるかもしれない──もちろん、それは映画作品から窺い知ることのできるある特定の発達領域に限定されるが──。

作品の中で印象に残っているのは、渡辺謙が演じる栗林中将が、戦いの合間に昔を回想したり、家族のことを思いながらスケッチを描いていたことである。そして、アメリカ軍との激しい戦いの最中のある夜に、ラジオで日本軍を励ます歌が聞こえてきたのときの日本兵たちの表情を忘れることはできない。束の間の安らぎや、なんとも言えない複雑な感情を抱いていた者もいるだろう。

いずれにせよ、スケッチを描くことや音楽といった芸術が、わずかばかりでも彼らの心に何かしらの影響を与えていたことが強く印象に残っている。芸術が世界平和を実現するというような寝言ではなく、すなわち芸術の力を過大評価するのではなく、それでいて芸術が何の力もないというような過小評価をすることもなく、やはり芸術にはいかなる状況においても人々の心に何かしらの影響を与える力があることは確かであろう。そこには心を動かす力があるのだ。

その他に印象に残っているのは、伊原剛志演じる西中佐の言葉「己の正義を尽くせ」と言う言葉である。上官の命令を思考停止状態で従順的に受け入れるのではなく、自らが正義だと判断したことを貫けというメッセージは、当時の時代背景や軍を覆う精神風土ではとても異例のものだったのではないかと思う。このメッセージはおそらく、イーストウッド監督が大切にしている信念の1つの現れではないかと思う。

確かに、発達理論の観点から言えば、より高度に発達した信念体系や正義感というものはあるだろうが、体制順応型の行動論理ではなく、自らの内なる声を聞き、自らの信念を持ってそれに立脚する形で行動せよという言葉が示唆することは大きいのではないかと思う。少なくとも、今の現代人において、そのような己の信念を貫いて生きているような人間はほとんどいないのだから。

最後に、二宮和也演じる西郷一等兵が、日本に残してきた妻に宛てて手紙を書いているシーンが印象に残っている。「この手紙は届かないかもしれないが、書いているだけでホッとするんだ」という言葉がそこにあった。今このようにして異国の地で毎日書いている一連の日記は、届かないかもしれない手紙を書いているようなものであり、現代社会がこんな有様であったとしても、書くことの中に平安な心の世界が広がっていることは確かな実感としていつもここにある。フローニンゲン：2020/9/30（水）14:22

6277.『11·25自決の日　三島由紀夫と若者たち(2012)』

振り返ってみれば今日は、協働プロジェクト関係のオンラインミーティングが2時間ほどあったが、午前4時半に起床して活動を始めていたためか、ロイ·バスカーの哲学書を2冊ほど再読、デジタルアートを4枚ほど描き、10曲ほど詩のような短い曲を作り、そして映画を2本見て、ドキュメンタリー番組を1つ見た。そして日記に関してはこれで5つ目の記事になる。

こうしたリズムで日々の生活を形作っていこうと思う。明日と明後日はオンラインミーティングは何もないので、可能であれば今日のように2本ほど映画を見ることができるかもしれない。映画を見ることは義務なのではなく、それを通じて学習と実践をより豊かなものにしていく楽しみとして行っていくことを忘れないようにする。

今日2本目の映画として見ていたのは、先日見た『実録·連合赤軍　あさま山荘への道程(2008)』を作った若松孝二監督の『11·25自決の日　三島由紀夫と若者たち(2012)』という映画だ。連合赤軍の誕生背景と浅間山荘事件に至るまでのプロセスは前々から気になっていたのと同じように、三島由紀夫の自決に至るプロセスもまた関心を引くものであった。端的には、連合赤軍の映画を見た後にこの映画を見て良かったと思う。

というのも、連合赤軍の思想と対極的にある思想を持っていたのが三島由紀夫であり――作品の中でも三島本人が述べていたが、もちろん連合赤軍に共感する部分もあるとのことだったが――、あの当時に支配的だった2つの対極的な思想を理解した上で三島が自決に至るプロセスを辿ることができたからである。おそらく前者の作品を見ないままであれば、三島の思想をあまりよく理解できなかったであろうし、彼を自決に導いた動機をほとんど理解することはできなかったであろう。

偶然ながら、いや先月に専門書の一括注文の際に政治学に関する書籍もいくつか入っていることからも、ここ最近の関心の1つは政治思想にあることは確かであり、それがゆえに、保守の思想家である西部邁先生の仕事を知ることになったのだろう。今まで左翼と右翼の違いもよくわかっておらず、右翼と保守を一緒くたに捉えているような自分がいたのだが、先生が生きておられた頃のインタビューを動画で聞くことによって、右翼と保守は全く別物であるということを教えてくれたのが西部先

生だった。また、保守とは何ぞやについては、社会学者の宮台真司先生の説明も非常に明快でわかりやすく、宮台先生の動画からも様々なことを教えてもらっている。

今回の一時帰国においては、西部先生と宮台先生の執筆された書籍も何冊かオランダに持って帰ろうとしている。実際のところ、突如として映画やドキュメンタリーを鑑賞することに目覚めたのは、宮台先生の仕事によるところが大きい。

西部先生の書籍については、『国民の道徳(2000)』『昔、言葉は思想であった ―語源からみた現代 (2009)』『保守思想のための39章(2012)』『西部邁の経済思想入門 (放送大学叢書) (2012)』『西部邁 最後の思索「日本人とは、そも何者ぞ」(2018)』『保守の真髄 老酔狂で語る文明の紊乱(2017)』『保守の遺言:JAP.COM衰滅の状況(2018) 』『大衆の病理―袋小路にたちすくむ戦後日本(1987)』の8冊をまず読んでみようと思う。

購入予定の文献リストにはさらに何冊か先生の書籍を加えたが、とりあえず今回の一時帰国に際しては、こちらの8冊を読んでおきたいと思う。とりわけ『国民の道徳(2000)』という書籍は700ページ近い大著であるが、今道友信先生の提唱した倫理学に関する書籍と合わせて、真善美の善の領域を探求していく上で是非とも読んでおきたい書籍である。そのように文献調査と文献の読解を進めながら映画を鑑賞していくと、その映画が主題とするテーマに対する理解が深まっていく。

『11・25自決の日　三島由紀夫と若者たち(2012)』の内容については、まだ消化している最中のものがたくさんあるので、それについてはまた日を改めて書き留めておきたい。作品の随所随所で、そして最後の三島の自決のシーンにおいて、自分の意識や無意識、さらには身体や感情が反応していることは確かであり、そこからもまた映画という媒体が何かしらの治癒と変容をもたらすものであることを実感した次第であった。フローニンゲン:2020/9/30(水)20:13

6278."This Giant Beast That is the Global Economy (2019)”の第8話を見て/

友人がかつて贈ってくれた『青の時代』

時刻は午後8時半に近づこうとしている。今日は2本の映画に加えて、先日から視聴しているAmazonプライムのオリジナル作品である"This Giant Beast That is the Global Economy (2019)”と

いうドキュメンタリー番組の最終話である第8話を見た。今回のテーマは汚職と経済に関するものである。汚職も地下経済を構成する1つの重大な領域であり、本エピソードの中では、アメリカ、インド、チェコ、シンガポール、マレーシアの過去の汚職事件と経済の結びつきについて取り上げている。今回のエピソードを通じて何かを深く考えさせられたかというとそうではなく、どちらかというと情報的な観点で、世界の様々な国の汚職事情を知るような形での視聴となった。

現在、シンガポールに何人かの協働者の方がいるのだが、シンガポールの駅のプラットホームで水を飲むことが罰金であるとは本作を見るまで知らなかったことである。世界には本当に様々な規制や法律があることに驚く。それらに無知であることは、様々な国を訪れる際や実際にそこで生活をする際に色々と問題を引き起こしかねないということを思う。

つい先ほどまで、『11·25自決の日　三島由紀夫と若者たち（2012）』について書き留めていた。三島由紀夫に関して言えば、私が20歳の誕生日の時に、当時アメリカの名門リベラルアーツカレッジに通っていた日本人の友人が、三島由紀夫の『青の時代』の文庫本を私にプレゼントしてくれたことをふと思い出した。その時彼は日本に一時帰国していて、わざわざ私が住んでいた国立市までやってきてくれ、何人かの友人と自宅でファイナンスに関するボードゲームをしたことが懐かしい思い出として残っている。そんな記憶を辿りながら、なぜ彼はあの時私に『青の時代』を贈ってくれたのかについてぼんやりと考えていた。

友人は、物語の主人公に何か自分と重なるものを見出したからこの作品を贈ってくれたのだろうか。それともこの作品から何かを学べというメッセージを込めてあの作品を贈ってくれたのだろうか。いつか再び彼と話す機会があれば、その点について尋ねてみたい。

本日行われた協働プロジェクト関係のオンラインミーティングの際に、協働者の方からオランダのコロナの状況について尋ねられた。正直なところテレビもニュースも全く見ていないので、今オランダがどのような状況にあるのかあまり理解していなかった。かろうじて定点観測的に、オランダ人の友人かつかかりつけの美容師のメルヴィンに、散髪のたびごとにコロナの現状について、とりわけフローニンゲンの状況について話をするぐらいだった。そこで改めてオランダの状況について調べてみると、状況が変化し、悪化の傾向に向かっていることがわかった。端的には、9/28日付のニュースにおいて、オランダは欧州の中で最もコロナウィルスの感染が進んでいる国に指定されたとのこと

だった。とりわけ、アムステルダムとハーグはヨーロッパの中でも感染者数が最も多い都市のトップ10に指定されることになったと知って驚いた。

アムステルダムやハーグには日本人の知人がいることもあり、それは他人事ではなかった。コロナは感染力は強いが致死力はそれほどでもないと言われているが、そうであったとしてもオランダは隣国のベルギーやフランスと並ぶぐらいにウィルスが再び蔓延しているということは念頭に置いておいた方がいいだろう。フローニンゲン：2020/9/30（水）20:13

6279. 一時帰国に向けて

時刻は午前5時半を迎えた。今朝の起床は午前5時前であり、今日もまた自分の取り組みに従事するための十分な時間がある。今日と明日はオンラインミーティングがなく、より時間に余裕があるだろう。

先日和書を随分と注文し、それを実家宛に送ってもらったのだが、西部邁先生の書籍も何冊か読みたいと思っており、今夜中にそれらを注文しておきたいと思う。明日は日本滞在中のホテルの予約をする。今回は厳選した和書を購入し、それをオランダに持って帰るために、大きめのスーツケースを持って行こうかと思う。厳選したとは言え、おそらく30冊ほどはオランダに持って帰ることになるであろうから、

これまでの機内持ち込み可能なスーツケースでは容量が足りない。スーツケースに入らない書籍を手荷物としてトートバックに入れるにしても限界がある。そうしたことから、今回はいつもよりひと回り大きめのスーツケースを持っていくことにしよう。これまでは日本に一時帰国する際には、手荷物として機内に持ち込むことのできる小さなスーツケースしか持って行っていなかった。それによって、到着した空港でスーツケースがベルトコンベアーで運ばれてくるのを待つ必要がなかったり、現地での移動が楽だという良さがあった。

しかし今回は、前者に関して言えば、そもそも乗客が少なく、さらには搭乗クラスの都合上、スーツケースは優先してベルトコンベアーで運ばれてくるだろうから、受け取りは速やかになるはずである。また移動に関しても、実家で書籍を受け取った後に滞在するホテルは、基本的に駅の近くのため、スーツケースを引きずって移動することはほとんどないと思われる。

今回は仕事の都合上、どうしてもスーツを2着持っていく必要があり、それに合わせてワイシャツやビジネスシューズも持っていく必要がある。そうしたことを考えると、尚更大きめのスーツケースを持参する必要があるだろう。ビジネスシューズはオランダに持って帰るが、2着のスーツとワイシャツはそれらを使い終えた後、滞在先のホテルから実家に送ってクリーニングに出してもらおうと思う。また、それに合わせて、読み終えた本の中でオランダに持って帰る必要がないと思ったものもいくつか実家に送ることを検討しているが、そうした吟味はできるだけ実家に滞在している間に行いたい。

今確認してみたところ、すでに実家には25冊ほど書籍を送っていて、東京にいる協働者の方に8冊ほど書籍を預かっていただいている。そして今夜、西部邁先生の書籍を8冊ほど購入する予定なので、41冊ほどの書籍となる。全てすでに吟味した書籍ではあるが、オランダに持って帰って今後何度も繰り返し読みたい本なのか、それとも実家に帰るたびごとに読み返せばいい本なのかを識別したいと思う。そうすれば、スーツケースの中に書籍を全て収めることができるだろう。

絶えず再定義･再構築していく存在としての自己。これは、ニーチェも指摘している人間の性質である。自己を絶えず再定義していき、再構築をしていく営みを今日も行っていく。その1つのきっかけを作ってくるのが創作活動であり、映画鑑賞でもある。

今日もまた映画を見ようと思っている。時間的な余裕があれば、今日もまた2本ほど見たいと考えていて、何を見るかについては、U-NEXTのマイリストに入れている作品の中から直感的に何かを選びたい。フローニンゲン：2020/10/1（木）05:47

6280. 今朝方の印象的な夢

時刻は午前6時にゆっくりと近づいてきている。ここ最近はめっきり気温が下がっている。ヒーターをつけるほどではないが、室内での格好は冬のそれである。日本からオランダに戻ってくる11月上旬はもう随分と寒くなっているだろう。その頃はもうマフラーが必要かと思うので、昨年と同様にマフラーを持参しようと思う。調べてみると、11月上旬の最高気温はもう10度を下回っていて、最低気温に関しては1、2度の日もあるようなのでとてもに寒い。これは本当にマフラーを持って行った方が良さそうだ。

結局今回は、やはり当初の計画通り、オランダに到着したら空港内のホテルで宿泊し、翌日はアムステルダムの美術館を2つほど巡って、その翌日にフローニンゲンに戻ろうと思う。今回はアムステルダム空港と関空の直行便であるから、移動の疲れはさほどないかと思うが、アムステルダム空港に到着してからそこからまた2時間半ほど列車に乗ってフローニンゲンに移動するのは大変かと思う。アムステルダムに到着したその日はすぐにホテルにチェックインをして、そこでゆっくりする。その翌日もゆったりとした気分で美術館巡りをして、その翌日にゆっくりとフローニンゲンに戻ってくるのが賢明かと思う。

今朝方は印象に残る夢を見ていたので、今からそれについて振り返っておきたい。夢の中で私は、どこかの国の高速道路を車で走っていた。ところがそれは道を逆走していて、前からやって来る車をよけながらのものだった。私の他にもう1台逆走している車があり、それを運転しているのは私の友人だった。

しばらく逆走をしていると、前から大量に車がやってきて、よけるのが難しくなってきた。しかし幸いにも車の速度はゆっくりだったので、なんとか問題なかったが、あるとき、一台のワゴン車がこちらの車を気にせずに突っ込んでこようとした。私は一体誰が運転してるんだと思って運転席を見たところ、ある有名な学者の先生だった。先生は歯に衣着せぬ物言いをすることで有名だが、根は優しいのではないかと思われることが多々ある。そんな先生がしかめ面をして、クラクションを鳴らしながらこちらに向かってきた。私はなんとか車をよけたところで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、またその先生が出てきた。先生と一緒に、ヨーロッパの田舎町を歩いていた。そこは確かにヨーロッパなのだが、雰囲気はアメリカの西部劇で登場するような街並みだった。砂埃が立ちそうな道を歩きながら、私は先生と会話をしていた。

私:「先生は先ほど、資本主義は輪郭を持たないような得体の知れないものだと仰りましたが、あえて色や形で表現するとどのようなものに喩えられるでしょうか？」

先生:「そうだね、赤いトカゲのようだと喩えることができるかもしれない」

私:「赤いトカゲですか…。その心は？」

私がそのように質問をすると、ちょうど通りかかった家の2階の窓から顔を出している日本人の老人がいた。その人はこちらを見て微笑んでおり、見ると、その方もまた著名な学者であった。その方は、私の隣いにいた先生に向かって、「〇〇君、あんまりワシのことを悪く言わんでくれよ」と笑いながら述べた。それに対して隣にいた先生は、「先生のことを悪くなんて言っていませんよ。また対談をしましょう」と笑いながら返した。その後、先生はポツリと、「あの爺さんとの対談はとても楽しみだ」と述べた。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私はオーストリアのザルツブルグの町にいた。ザルツブルグは内陸にあるのだが、どういうわけか、ヴェネチアのように洪水に見舞われる時期があるとのことだった。ちょうど私が滞在しているときに洪水がやってきて、街中の道は随分と浸水していた。そんな中、サイクリングバイクで街中を駆け抜けていく人たちの姿を見かけた。彼らは全身が土砂まみれになっていたが、それを気にせずサイクリングバイクでどこかに向かっていた。

街中を歩いていると、どこかの国の王子が結婚9周年の旅に出かけるという話を聞いた。その王子はちょうどザルツブルグに滞在しているようなのだが、洪水の時期に観光は大変だろうと思った。王子と王女の旅は1年間にかけて行われるものらしく、自分も同じようにそうした旅に出かける時間的ゆとりがあると思ったところで夢の場面が変わった。

最後の夢の場面では、私は日本だと思われる国の沿岸部にいて、ゲーム屋の中にいた。そこでは面白いゲームが色々と売られていた。それはテレビゲームだけではなく、ボードゲームを含め、おもちゃに関してもである。

店員は若い女性が務めていて、彼女もまたゲームがとても好きなようだった。店員のその女性に話しかけてみると、彼女はちょうど今自分がやっているゲームの解説書を作っている最中だった。見ると、地図のような形で広げられるようなカラーの立派な解説書だった。それを1つもらうことにし、そのゲームについて少し話をした。すると突然、私の体は店の外にあった。

見上げると、そのゲームの裏ボスである巨人がそこにいた。私はその巨人について解説書で調べようと思って視線を解説書に移すと、開いたページに2体の伝説のドラゴンの絵が出てきた。そこで

ふと顔を上げると、まさにそこに2体の異なる伝説のドラゴンが現れ、私のことを凝視した後に雄叫びを上げ、どこかに飛び去って行った。

そこで我に帰ると、数百メートルほどの大きさの巨人が、私の方をじっと見ていた。私のことを踏みつぶすのかと思いきや、そのようなことはせず、大人しくじっとしていた。それを見て私は、今の自分ではこの巨人には到底敵わないと思い、巨人を倒すためには相当な鍛錬が必要だと思った。もう少しこのゲームと付き合う必要があると思ったところで夢から覚めた。フローニンゲン：2020/10/1（木）06:27